

呈したが、しかしそれによつて本書の価値は
いささかも害われるものではない。本書はこ
の地域の研究者にとつて、必見の資料とい
ふべきであろう。(A5版 昭和三十三年三月
天理市役所発行 申込先同市教育委員会)

(熱田 公)

高知市史編纂委員会編

高知市史 上巻

市制施行七十周年記念事業の一つとして市
史の編纂が企てられ、まず上巻が豪華な装い
をもつてお目見えした。

歴史地理・社会経済史方面に真摯な研究を
続けている市立商業高校教諭横川末吉氏が古
代・中世編(長宗我部時代まで)を、旧藩主
山内家にあつて長年、史料編纂に従事し、藩
政史に造詣深い平尾道雄氏が近世編(廃藩置
県まで)を執筆された。

高知市は昭和二八年一〇月以降いわゆる新
市が続出するまでは県下唯一の市であつた。
本書は高知のもつこの中樞的役割と、土佐の
もつ南海の僻地的位置に対する十分な認識の

上に立つてなされており、従つて市史の舞台
を随時土佐一円に拡げ、また各時代を見るに
は日本の中央の動きを基として見ることに特
に意を払つている。弥生式時代以来、本土に
おける全国的な社会発展から「凡そ百年近」

くも遅れていたが、南北朝時代からは「ほぼ
全国的な動きと一致して行動しうる」までに
追付き、明治維新の頃は全国に先駆けるほど
に成長した土佐の歩みが克明に叙述されてお
り、高知市史と銘打つものの、あるいは県史
といつてもよく、さらに言うならば、県民の
為の国史ともなつてゐる。従前の名著大正一
三年刊『高知県史要』と比較するとき、著者
等の功による地方史学発達の跡が歴然と判
る。例えば、元親をして大高坂城下町の建設
を中途で断念せしめた根本的原因として、従
来の水害説をとらず、在地給人の家臣団が、
旧来の所領関係を変化させる近世化への進展
に対して、これを喜ばなかつたこと、をあげ
るなど、新説卓見に満ち満ちている。

史料のうち、長宗我部地検帳の活用が目
をひく。この帳は記載様式・内容において一
般の大閤検地帳と異なり、土佐の特殊な社会構
造を暗示している上に、一の欠冊も無く、極

めて高く評価されているもので、戦後山内家
から一般の利用に開放せられるに及んで当地
方史学界の花形となつた(原本三六八冊は三
年から逐次刊行中)。

その外観の美もさることながら、内容にお
いても香りと高き本書は、全国の市史の中
でも異彩を放つてあらう。本書の出現は最近
における地方区の修史ブームの一端をなすも
のであらうけれど、三二年本市刊行の日本都
市学会近畿支部編『高知市総合調査』と経緯
相対つて、現実の市政に資するところあらむ
を深く期待されているようである。このこと
は中巻(三五年刊行予定)以下の出現によつ
て、なお明らかにされるであらう。(上巻
B5版 本文六六六頁 昭和三十一年一月
高知市役所発行) (谷淵梅亀)